

露伴〈五重塔〉小考

日 沼 滉 治

一

幸田露伴の二十歳代前半の代表作『五重塔』(明24・11・7「其一」)と明25・3・18「其三十一」⁽¹⁾〈現、其三十二〉、明25・4・12「五重塔余意 其一」〈現、其三十三〉と明25・4・19「五重塔余意 其二」〈現、其三十五〉、『国会』については、すでに注釈⁽²⁾があり、主題や構想についての評論・論考も少なくない。この小論は、とくに主題について従来の主な論をおおむね検討しおえて提起した観のある広瀬朱実「『五重塔』結末部への疑義と考察」⁽³⁾に導かれながら、(一)作中の主要な舞台となった谷中^{やなか}感応寺の位層、(二)五重塔建立にかかわる宮大工の意義、(三)結末部を含む文体、の三点をめぐって思いよるところを提示しようとする。ただし、塔婆建築については『日本建築基礎資料集成』(中央公論

美術出版)「第十一 塔婆I」など未見であり、朗円上人の論した法話(其九)についても、そもそもこれが露伴の創作に成るものか、原話があるものなのか調べている途中である。そこで、しばらく「小考」と題して大方の示教をまつことにした。

二

小説『五重塔』の大事な舞台になっている「谷中感応寺」(其四)。宗派については、作中でその大和尚を、こう述べている。

宇陀(4)の朗円(4)上人とて、早くより身延(5)の山に螢雪(6)の苦学を積まれ、(其四)

日朗とか日円とかしてないのが少々気になるが、日蓮宗らしい。だが露伴が「自作の由来」(5)で語っていた谷中天王寺(6)そのものが、はじめの日蓮宗から天台宗に改まり、さらに長耀山感応寺から護国山天王寺へと山号寺号を変えて明治に至っている。いったい露伴は作中の時期をどの年代に設定したのか。作品の末尾近くに不意に現われる「六十四年は既に過ぎたり」(其二十二)がここからんで、なにか主題にかかわるものが含まれているようである。

惜しいことに、昭和三二年(一九五七)七月六日の早朝に心中の放火で五重塔が焼け失せたなり久しいが、土地の雑誌『谷中・根津・千駄木』(6)が特集を出すなど、今も住民に慕われている。小説がよかったせいかも知れないが、当の露伴も五重塔を眺めては愉快だったという。この愉快がのちのち作用したのかも知れない。風情のある塔だったと

いう。名所評判記『江戸砂子』⁽⁷⁾にはこうある。

○長耀山感応寺 寺領三十石 上野末。／開山日蓮上人、二世は日源上人也。中興開基は十世日長上人也。慶安四寂。／ゆゝしき日蓮宗の道場たりしが、元禄年中、天台宗に改まる。／本堂 毘沙門天 毎年正九月の十四日、富の執行有。

寺と塔の変遷を、しばらく齋藤月岑^{げっしん}の『武江年表』(金子光晴校訂、喜多村信節^{のぶよ}『武江年表補正略』と対照、昭43・10、二冊、東洋文庫)によつてたどると、寛永年中に五重塔起工、正保元年(一六四四)竣工、そして明和九年に焼失している。その旧暦二月三〇日の記事を引くと、

又同日暮六時^(どき)、本郷丸山町より出火して、森川宿、追分^(おひわけ)、駒込、白山、傾城^(けいせい)が窪入口迄、うなぎ縄手、土物店^(だな)、千太木入口、根津谷中感応寺、芋坂根岸に至る(翌晦日^(ひつじ)未刻、此の所にて止まる)。

これが二九日の昼ごろ目黒行人坂の大円寺から出火して浅草・吉原・千住まで総なめにしたあとの記事である。三日の今でいえば午後二時にあたるころ根岸と京橋の火が大雨でようやく鎮まった。世にいう明和の大火である。

二〇年後の寛政四年(一七九二)に再建された。これは『東京案内 下巻』(明42、東京市編纂)の「寛政三年再建したるもの也」と一年くい違ふけれども、後者の寛政三年に従いたい。そのあと天保四年(一八三三)に「谷中長輝山^(ママ)感応寺、護国山天王寺と改む。」とある。雑司ヶ谷に日蓮宗の僧徒が別に感応寺を興した際に幕命によつて改めたのである。その後も春秋二回の富くじで市民に親しまれ、安政二年(一八五五)の大地震にも倒れることなく、慶応四年(一八六八)の戊辰戦争で伽藍の大半が焼け落ちた時にも庫裡と五重塔は残り、明治二四年(一八九一)〜二五年の小

説連載に至っている。

してみれば、小説にいう日蓮宗「谷中感応寺」五重塔なるものに当たる實際の五重塔は、寛永二十一年正保元年（一六四四）から元禄十一年（一六九八）に及ぶ、せいぜい五四年間に限られ、創建は小説から二五〇年前のことになるところが小説は次のように結ばれている。

百有余年の今になるまで、譚は活きて遺りける。（其三十五）

仮りに作中の「今」を小説『五重塔』が完結した明治二五年（一八九二）だとして、そこから時代を「百有余年」さかのぼれば、「安永・天明のころ（一七八〇年前後）以前」にはなる。実は小説『五重塔』が完結した一〇一年前に谷中天王寺の五重塔は現に再建されていたのである。起筆の百年前、完結の「百有余年」前。ただし再建であり、天台宗谷中天王寺である。

いま一つ、年数の謎がある。作品の最後を襲った暴風雨（其三十二）に「飛天夜叉王」を現わして次のように怒号叱咤させたその本意をどのように解すればよいのか。長い引用になるが写してみよう。

（略）汝等人を憚るな、汝等人間に憚られよ、人間は我等を軽んじたり、久しく我等を賤みたり、我等に捧ぐべき筈の定め^にの牲^をを忘れたり、（中略）彼等に長く侮られて遂に何時まで忍び得む、我等を長く侮らせて彼等を何時まで誇らすべき、忍ぶべきだけ忍びたり誇らすべきだけ誇らしたり、六十四年は既に過ぎたり、我等を縛せし機運の鉄鎖、我等を囚へし慈忍の岩窟は我が神力にて扯断り棄てたり崩潰^さしたり、汝等暴れよ今こそ暴れよ、何十年の恨の毒気を彼等に返せ一時に返せ、彼等が驕慢の気の臭さを鉄圍山外に攫んで捨てよ、（下略）

怒号のすさまじさと「鉄圀山外」という汎宇宙的な壮大な構えにくらべて、「六十四年は既に」といい、それを「何十年の恨」といいかえた年数は妙に生々しく具体的である。「百有余年」は、五重塔建立譚を臚化する叙法と見てよからう。しかし「六十四年」間の「飛天夜叉王」の「恨」は、日蓮宗谷中感応寺五重塔が実在した五四年を十年はみ出している。いったい感応寺の天空に襲い来った飛天夜叉王とはいかなる鬼神であろうか。

夜叉の眷族を率いる夜叉王は毘沙門天すなわち多聞天である。もと邪神。古代インドの宇宙像の中心―須弥山の第四層に位して北方を護り、四天王の筆頭にある。鉄圀山はその宇宙の外辺。感応寺は元禄十一年（一六九八）に天台宗の寛永寺に属したとき、毘沙門天の像を比叡山円乗院から迎えて洛北の鞍馬山に擬せられた。それを六四年さかのぼった寛永十一年（一六三四）に眼をやると、諸宗本山末寺帳を幕府へ提出のほか、切支丹禁制、伊勢神宮など社寺の法度が布かれた年である。

さらに日蓮宗谷中感応寺五重塔の起点に当る寛永二十一年正保元年を六四年さかのぼった天正八年（一五八〇）あたり眼をやると、その年二月に本願寺顕如が織田信長と和睦している。比叡山焼打ちを含む織田政権の石山攻めが終わったのであり、その前年五月に安土問答があったばかりである。日蓮宗が詫び証文・罰金・斬罪などの屈服を強いられた事件として知られ、日蓮宗の谷中感応寺が不受不施悲田派のゆえに禁圧されて天台の毘沙門天を迎えた、その先ぶれをなしている。

総じて天正八年（一五八〇）に至る十年は、教権をしのいで俗権が優位に立った潮目とおぼしい。潮目をいうなら、明治二三年（一八九〇）に国会の開設を期して朝日新聞社の社長村山竜平が一月二五日、東京に新聞『国会』を創

刊する。露伴は『読売新聞』を離れて『国会』に入社し、谷中天正寺町二十一番地に家を買って住んだ。越えて二四年（一八九一）月一月九日に第一高等中学校嘱託の内村鑑三が教育勅語（前年一〇月三〇日発布）の拝礼をこぼみ、ために解雇されるという「不敬事件」がおきている。二五年（一八九二）三月四日、帝国大学教授の久米邦武が前年発表の論文「神道は祭天の古俗」（明24、『史学会雑誌』二三〜二五号）により休職を余儀なくされた頃、小説『五重塔』は普請場の刃傷沙汰（其二十五）とその後始末にかかっていた。そして唐突に「其三十」で工事は竣工にこぎつけ、「其三十一」で嵐が吹き狂ったまま一か月近く掲載が跡絶える。

「六十四年」（其三十二）と結びの「百有余年」（其三十五）は、この休載をはさんだ一か月たらず、回数でいえば前後四回の間姿を見せたのである。

三

いったい五重塔とはどういう性質の建造物であろうか。仏教にいう塔婆、すなわち卒塔婆そとばの一樣式であり、古代インドから伝来した時代と地域と宗派によってさまざまであるが、露伴の小説に従って室町期以降の関東に範囲を限るなら、あくまでも仏教寺院の象徴的建造物として、仏舍利すなわち仏や聖者の遺骨を供養し奉安することを本来の目的とする。仏像などを奉じた木造の仏塔である。関西では寺社に仕えて古代から檜ひのきづくり、関東なら中世以来の武士の気質をうけて「槻けやき」（其一）づくり、世間の楼閣とはおよそ類を異にし、すくなくとも信仰にかかわっている。つま

り五重塔は伽藍の象徴である。小説にはこうあった。

そもく微々たる旧基を振ひて箇程の大寺を成せるは誰ぞ。(其四)

徳を慕ひ風を仰いで寄り来る学徒のいと多くて、其等のものが雨露凌がん便宜も旧のまゝにては無くなりしまゝ、猶少し堂の広くもあれかしなど独語かれしが根となりて、(其四)

何よりも「宇陀の朗円上人」の徳風と「随喜渴仰の思ひを運べるもの雲霞の如き」世のありよう。そして「徒弟」「信徒」の寄付・喜捨を説く勢い、またたく間に集まった寄進を執り行ふ「世話人」「用人」の世才などが働いて、「当時に有名なうての番匠ばんじやう川越の源太が受負ひて作りなしたる」本堂・廻廊・客殿・居間、学徒所化の居るべきところ・庫裡・浴室・玄関などであった。

川越の源太が「作りなし」宇陀の朗円上人の「成せし」伽藍に、そもそも塔は考えられていなかった。「雨露凌がん便宜たより」のなお少し広くもあれかしと独語つぶやいて成った「箇程かほどの大寺だいじ」大伽藍に含まれてはいなかった。残る淨財の執り行いを伺つて一言「塔を建てよ」と仰せおほがあつて、初めて谷中感應寺を象徴するものが小説『五重塔』の心柱に置かれたと見てよいだろう。

『五重塔』を収めた青木嵩山堂版『小説尾花集』(明25・10)の表紙絵は、上野谷中と思われる高台の木立を高くぬきんでて美しいが、上部の三層から五層全体をおしはかると、異様なほど丈高い塔になってしまう。そしてそれでよいのだと思われる。露伴が作中に建立した五重塔は大伽藍を従え、時勢の地平をぬきんで高く、より高くそばだつべきものであつたらうと思われる。江戸根生いの信仰に篤い幕臣の家になつた露伴の現に眼の前にあるものは、時

世の転変に処することまことに拙い谷中天王寺であり上野寛永寺であったからである。露伴は幕府表坊主の四男。幸田鉄四郎成行の目に、伽藍の多くを失って焼跡にたたずむ五重塔は剛毅である。愉快である。半面、不遇の趣きを伴うだろう。

たまたま戊辰戦争に上野寛永寺は彰義隊の拠り処となつて堂宇の大半を失い、末寺の天王寺もあらかた焼け、唯一の檀家というべき幕府が瓦壊した上に天台宗の実権も比叡山延暦寺にもどつて、すこぶる振わない。同じ徳川家の菩提所であつた芝の三縁山増上寺が北海道に広大な寺領を払下げてもらう、そういった才覚もない。明治四年（一八七一）には門跡制度をはなれ、民間から出た上人が門主を継ぐことになつた。

三田村鳶魚『寛永寺の上野』（大11・5〜7、『三田村鳶魚全集』第八卷所収）の「赤穂義士の救解」によれば、こうある。

上野は現在の門主大照円朗、その前が救護栄海（浅草寺現在）、その前が篠原守慶、その前が松山徳門で、四代溯れば竹の園生のやむことなき御方になる。

つまり寛永寺の門主は大正十一年のころ円朗であるが、この上人は明治二〇年代から鳶魚三田村玄竜にとって頭の上らない名僧であつたようである。武州川越在の松山の農家の生まれながら、一一歳で家を出るとき鰯を食したきり何の肉も口にしたことがない。若いころ芸者に慕われしげしげ言い寄られるのにふるえあがつて汽車のない時分に比叡山まで逃げて三年間も帰らなかつた、これが一生一度の女難というものだと思得ているらしい円朗上人であつた。鳶魚のこの記述は信じてよいだろう。鳶魚その人が尋常の胆だましいの持主でない。武州八王寺の生まれで、名づ

け親の碩学島田蕃根ちうねに師事し、三多摩の壮士に加わって保安条令にふれた頃、世を捨ててしばらく上野の寛永寺に身を隠し、円朗について修業をつづけたことがあるからである。島田蕃根と円朗上人、この二人には頭が上らなかつたらしい。日記の大正二年（一九一三）一〇月一八日（日）の条にこうある。

全生菴に往き来島恒喜氏二十三忌辰法会に参ず、帰途展墓し、かねて井上正鉄翁例祭に参ず。

来島恒喜といえ、条約改正に反対して明治三二年（一八八九）一〇月一八日に外務大臣大隈重信に爆裂弾を投げたが負傷させただけに終わり、その場を去らず割服した人物である。

当日大隈の乗った馬車が近づくのを、坂の上から来島に合図したのが鳶魚とびうだったという。（昭53、早稲田大学坪

内博士記念演劇博物館『演劇博物館五十年』〈菊池明〉）

その大隈の口ききによって釈放されたのが縁で、後に『江戸語彙』原稿や『荅苞』がんぼう二百冊を含む三田村文庫二五〇〇点を演博に寄付することになるが、釈放当時は世の中がおもしろくなく、上野寛永寺にこもって円朗についたのである。円朗上人の墓は寛永寺から天王寺へ進む墓域（9）にある。ただし『五重塔』の朗円上人では文字が上下で入れ替っている。が、「身延山」みのぶのに修業を積んだにしては日蓮上人にちなむ「日」の字を帯びていない。それだけに「円」の字を帯びた寛永寺の円朗上人がゆかしいのである。

東叡山寛永寺。この東叡山という山号は、川越喜多院を再興した天海が後陽成天皇より賜り、のち寛永二年（一六二五）江戸城鬼門にあたる要地を占めて本坊円頓院を建立、みずから興した寛永寺にゆずり東の叡山の意義を托したものである。寛永とは家光が源氏の長者、三代將軍の職にあった時の年号であり、家光は喜多院に生まれ育ち、感応

寺に寺域を寄せている。川越もまた江戸の北方を支える要地である。寛永年間に老中を勤めた松平信綱は島原の乱鎮定の功によって川越城六万石（のち七万五千石）を与えられている。

戊辰戦争で焼けて十年後に上野寛永寺は一部再建工事はじまった。小説『五重塔』の十年ほど前である。用材は川越喜多院の本堂を崩して、新河岸川を東京へ運び、隅田川から浅草へ陸揚げし上野まで移したと、鳶魚『寛永寺の上野』「ノッソリ十兵衛」は伝える。小説の谷中感応寺を「受負ひて作りなしたる」と世に聞こえ、「之を成す」と五重塔に銘せられた「番匠川越の源太」。彼があくまでも江戸っ子好みに語られながら川越を冠し源太郎と呼ばれ、十兵衛に譲りに譲ったという素地をこのような見地からも理解しておきたい。露伴が「自作の由来」で伝える源太は川越を経て来た名工のようだが、あまり譲る風でもない。江戸根生いでもない。

其れから越後の人で源太といった名工があつた。越後から江戸まで来る間に、此の男の拵えた堂塔など、實際今も残つてある。詰り才物な大工の話聞いた。之れを十兵衛に対して源太の方の型につかつた。「自作の由来」源太が存外好ましい江戸っ子に仕上がったのは、モデルよりも作者の腕のせいだろう。好ましく仕上げるだけの心意が働いたと見るのである。ひきかえて十兵衛のほうは、モデルはいい。抜群にいい。長くなるが「自作の由来」から引用しよう。

彼の中にあるのッそりと云ふ男は、本来のッぼりと言つたえらい大工があつたのを取つたのだが、必ずしも『五重塔』を拵へたと云ふ訳でもないが、方々の堂塔を建てゝある。此の話を私は、倉と言ふ大工から聞きましたかね、此の倉と云ふ男も極めて妙な人物で、無学の聖人とでも云ふ趣のある、欲はなく、処世の才はなく、併し技

術には頗る達してゐるやうに、私達の素人目には見えた。(中略)其の口のきゝやうなども、極のろく、一体の挙動が浮薄でない。余程奥ゆかしい所があるから、仕事の間などに道具の事に就いて話を聞いて見ると、此奴のもつて居るのはちびてはゐるが何れも名作だ。(中略)私の『五重塔』は此の話をして呉れた倉と云ふ男を、全部ではないが、幾分かモデルに使ひ、其れにはじめに話したのッぽりの綽名を少し変へて用ひ、其の外聞いた話なども加味して、直近所にあつた(当時露伴氏は谷中天王寺近傍に住めり)五重塔へもつて行つて、綜合したのです。三田村鳶魚『上野と浅草』が紹介する尾張の平松十吉は、せいぜい十兵衛の十に暗合したものでらう。倉も「のッぽり」も番匠であり、露伴の身近かに番匠が現に働いていたということである。さて、十兵衛も小説の中で生きて働いたかどうか問題である。

法隆寺の棟梁だつた西岡常一『木のいのち木のころ(天)』(一九九三・一二、草思社)を引用すれば、

明治維新までは宮大工やなくて寺社番匠といつてました。廃仏毀釈のとき、寺というたらあかんといわれて、寺の字を取らなならんようになりましたんやけど、社大工ではおかしいというて「宮」大工になつたんですな。

露伴が『五重塔』で「有名なうての番匠ばんじやう川越かわごへの源太げんた」(其四)と呼んだのは匠人のありようを正しく言いあてていたのだ。西岡棟梁の内弟子にはいつた小川三男が弟子入りを願ひにたずねた當時を語つてゐる。

棟梁は仕事がなくて、弟子を養う余裕はないつていつてたけど、本当に仕事がなかつたんやな。法隆寺の境内の仕事場で鍋なべの蓋ふたを作つていたもんな。(『木のいのち木のころ(下)』、一九九三・一二、草思社)

世才に疎い十兵衛が「溝板どまいたでもたたいて一生を送りませう」(其十五)と言ひ、源太が「一生溝板どまいたでもいじつて暮せ」

と怒ったのは、番匠と番匠が対立した場面で激した言葉の文には違いないが、これまた仕事に恵まれない時の番匠のありようを言いあてていたことになる。

しかし、問題はその先にある。この時、十兵衛がなぜこうまで銷沈してしまったのか、その性根が源太に伝わり、読者に伝わるように小説が仕上がっていたかどうかにある。どうも源太に伝わらない、こちらにも伝わってこないようである。なにせ銷沈ぶりは甚しい。源太のほうからあばら屋をたずねて来て二人で塔を建てようと持ちかけた親切が親切でもなんでもなく、十兵衛に、建立から身を引こうとまで思いつめさせるような「情無い」申し出であった、ということらしい。

銷沈した性根が伝わってこない訳はいろいろと考えられる。まず十兵衛にとって自明すぎる。「情無い」と言い切っているほどである。が、口べたで筋道立てて言えない。自明という点では朗円上人と同断。まずいことに作者の露伴が「無学の聖人」の倉から感得して作意を得ているから、肝心なところで事がさわりなく運んでしまう。朗円上人の谷中感応寺普請、十兵衛の五重塔建立、どちらもあれよあれよという調子に涉らせて、平気である。次に源太がなまじ江戸好みの棟梁であることが禍いして十兵衛の性根が伝わらない。源太の気働きが加わる分、いつそう読者に伝わってきにくくなる。「仲町の甲州屋様の御本宅」「根岸の御別荘の御茶席」（其三）など、女房のお吉の口から出た話題だから源太本人の本音は聞けないが、手広くこなせて「溝板」よりよほど上等に思えるのが、この際邪魔している。最後に、われわれ読者が小説の読み方に馴染んでしまった。これが小説『五重塔』の十兵衛の銷沈を伝わりにくくしている一番手ごわい訳なのではないかと思われるが、文体の問題として後でまとめて考えたい。

十兵衛にとって自明であつたこと。それを一言で尽くせば、仏塔は折衷では建てられない、ということではなかつたろうか。五重塔を建立するという機会にめぐり合わせ、朗円上人に推参する、「五十分の一の雛形」を提出する（其五く其七）。その時、源太の「設計予算」の次元を遥かにこれは抜いていたはずである。これは番匠十兵衛の生涯の結晶。あれは棟梁源太の、要するに設計予算。ただし、実績と「人の信用」は源太にあつて十兵衛に欠けていたものである。

「雛形」に関する限り、上人にも事は自明である。その理に従つて十兵衛は源太の持ち出す折半話（其十三く其十五）も資料（其二十一く其二十三）も受けない。膠のなさすぎるのは生まれつきにしても、しかし、これは俗に二度ならず三度まで、つけ上がらせれば限もない振舞いに映らないか。事は棟梁の資質とその形象にかかわつていたようである。

その点、川越の源太には人を束ねる徳量があつた。ふたたび西岡棟梁『木のいのち木のころ（天）』に拠ろう。

「木の癖組みは工人たちの心組み」

建築は一人ではできませんのや。大勢力の力を結集して出来上がるものなんですな。（中略）職人も木と同じように癖がありますわ。それぞれ自分の腕を誇り、それで家族を養っているんですから、一筋縄ではいきません。そんな人たちばかりです。この人たちをまとめななんのです。癖も違ふし、腕も違ふ。うまい下手、早い遅い、さまざまですわ。それぞれ得手不得手もありまっしゃろ。建物が大きければ大きいだけ人がいらしますわ。大工だけでなく、石工、左官、瓦屋、諸職の人がいてますな。この人たちを集めての仕事で投げ出すわけにはいかない

んですな。気に入らんとっても辞めるわけにはいきません。(下略) (「法隆寺大工の口伝」)

満で二四歳の露伴に番匠の性根や棟梁の資質がそこまで見透せたのだろうか。機縁は熟していたらうと考える。それが朗円上人の考量の中味であり、作者自身への公案、ひるがえって源太と十兵衛へ諭した謎であつたらう。朗円上人にどこか禅僧の趣を感じて法名に眼をやるのは、そのゆえである。謎は十兵衛にとって自明。お願いか辞退しかない。だが源太には「男児」(其十九)という片付かない公案が改めて与えられた。それを棟梁の資質と解して今までの作品を顧みれば、『風流仏』(明22・9、『新著百種』第五号、吉岡書籍店)の彫刻師珠蓮、『一口劍』(明22・8、『国民之友』夏期付録、民友社)の刀鍛冶正蔵、『辻浄瑠璃』(明23・2、『国会』)、『寝耳鉄砲』(明23・3、同)の釜師虎吉(道也)――職人物がすでにあつて、その上で『いさなとり』(明23・5〜11、円)連載百回が完結していたのである。主人公彦右衛門の秘められた前半生に放浪・捕鯨・惨劇が封じ込めてあり、技能から事業へと切り換わっていく視点が熟していたと見たい。近世日本のマニユファクチュアを捕鯨業に認めて日本のルネッサンスを論じ露伴のこの作に注意した福本和夫『日本捕鯨史話』(一九七八新装版、法世大学出版局)がある。

加えて言えば、作家になる前の成行は北海道札幌幌島の後志国余市町の電信分局で足かけ三年、鯨場の実情と網元の組織とを見聞している。それらが感応寺の普請場まで色あげされた。が、血の匂いは残つたのである。源太の手の内から清吉のような男がとび出して十兵衛に傷害を加える振舞いに出ている。

この刃物沙汰を作者はどう取り捌くか。源太もお吉も、め組の鳶の鋭次親分も、心の片隅に清次の仕打ちをよしとするものがあつたから、いずれ江戸っ子の人情を義理で取りまわして各人の行跡はみごとに曲折し交錯する(其二十

六く其三十)。またその埒内で取り捌く露伴の語り口も確かに熟達していた。

しかし、そもそも江戸っ子の義理人情が如在なく通じて心が解けるような十兵衛お浪にできていない小説なのだから、三度目の和解の場(其二十八)も型だけのものとなつて、源太の不満も怒りも内攻する(其二十七)。それでも作者としては、工事だけはともかく抄らせて塔を竣功させるほかないだろう。小説の出来も源太の公案も別。新聞の連載物だから進めるしかない。十兵衛が刃傷沙汰の翌朝傷をおして普請場に姿を見せて現場の空気が一変する、しかし次のそらぞらしさだけはどうしようもない(其三十)。

十兵衛よもや来はせじと思ひ合ふたる職人共、ちらりほらりと辰の刻頃より来て見て吃驚する途端、精出して呉るゝ嬉しいぞ、との一言を十兵衛から受けて皆冷汗をかきけるが、是より一同励み勤め昨日に変わる身のこなし、このあと七三字で竣工してしまう。いわく、

一をきいては三まで働き、二を云はれしには四まで動けば、のっそり片腕を欠いて却て多くの腕を得つ日ゝ仕事抄取り、肩疵治る頃には大抵塔も成あがりぬ。

引用の直前まで、棟梁としての失格をお浪にかこち無理に自分を励まして出て来た十兵衛に起こった、これは奇蹟である。予定調和の結末だったろう。しかし何か完成を裏切っている。

はたして連載は「其三十二」のあと跡切れている。大休止のあと四回一気に運んで、「其三十五」の大尾に至るのである。

四

小説『五重塔』は文体の壁に衝き当たったようである。この小説はしばしば劇化され上演され、映画にもなった。劇化はもともと解釈をはらんでいる。手ざわりのある解釈を提供して小説の読者をいま一度納得させなければならぬ。ところが次のような評がある。

「五重塔」の芝居・映画・テレビを見ていつも感じたことは、十兵衛はどうも凶々しいように見えるということである。(昭47、塩谷賛『幸田露伴 上』、中央公論社)

凶々しい十兵衛では観客の嫌われ者である。主役が嫌われ者では劇が成立たず、だいいち嫌われ者の棟梁に仏塔の建つわけがない。それが見る見る建ってしまった。歴代のシナリオは手を焼いたことだろう。まず明治三七年(一九〇四)九月一日より大阪弁天座の夜の部で雁治郎・卯三郎ら。同年一〇月三十一日より東京座で竹柴晋吉脚色により芝翫・猿之助・市蔵・高麗蔵ら。——この辺の記事や露伴の談話および竹の屋主人(嚮庭^{あえば}篁村)の評が雑誌『歌舞伎』の第五五号・五六号に見えるが、いずれも成功したとは思えない。

くだって昭和一九年(一九四四)八月一七日封切の脚色川口松太郎・監督五所平之助、花柳章太郎・柳永二郎以下新生新派出演に逢初夢子を迎えた一時間七分ものは、「淳風美俗工匠精進」と認定された明治物だが、今日シナリオが見当らず、四〇分たらずの映画を見たかぎりでは塔の丈高さがなく、風俗物になっている。何よりも大矢市次郎の朗円上人が「徳風並びなき高德とも見えない」(昭19・9『映画評論』、大塚恭一「作品評」)のがつらいところである。

放送台本も含め宇野信夫・里見淳・久板栄二郎・伊馬春部・津上忠の脚色を見て思うことは、朗円上人の徳風、十兵衛の内面、など科白にないものを納得させるむずかしさである。飛天夜叉王怒号の場など特にむずかしいらしく、塔の中で源太と十兵衛が血闘する修羅場にして切り抜けたものもある。

たぶんシナリオの罪や読みの浅さの問題ではあるまい。小説『五重塔』の文体が初めから劇化しにくく出来ていたものらしい。出だしを振り返ってみよう。

木理美しき槻洞、縁にはわざと赤檜を用ひたる岩畳作りの長火鉢に對ひて話し敵もなく唯一人、少しは淋しきうに坐り居る三十前後の女、(中略)年増嫌ひでも褒めずには置かれまじき風体、我が物ならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢が随分頼まれもせぬ詮議を蔭では為べきに、さりとは外見を捨てて堅義を自慢にした身の装り方、(中略)引つ掛けたねんねこばかりは往時何なりしやら疎い縞の糸織なれど、此とて幾度の水を潜つて来た奴なるべし。(其一)

芸者あがりの堅義の女房の留守居姿を、見かけと推測と評判をまじえて四一六字で切れ目なく一息に叙述して改行し、その女房の仕草から内心へ及んでいく。「多分は良人の手に入るであろうが憎いのつ、そりめが対ふへ廻り」以下、独白とも思案とも仕方話ともつかない叙述の末に、「嗚呼何にせよ日出度う早く帰つて来られ、ばよい」

と、口に出さねど女房氣質、今朝背後から我が縫ひし羽織打ち掛け着せて出したる男の上を氣遣ふところへ、表の骨太格子手あらく開けて、

「姉御、兄貴は、なに感応寺へ、」と新しい人物の応答はしよつた会話へ切れ目なくつづけた挙句に、「と、無骨な礼

を為^したるも可笑^{をか}し。」という評で結ぶのである。外見の詮議臆測から内面に推参し再びその場の傍観者にもどってくる独特の叙法に注意しよう。

この文体は何だろうか。初めから劇化の手間を省いてくれるような、それでいて、その長い叙述をト書きに譲り渡してしまつては、残る内面を科白にもしかね、改めてシナリオに組み直すには恐しく手間のかかる叙法である。場の情景が奇妙なくらい具体的である。調度品も服装も仕草も入念に語られる。その一方で、過去の経歴や人間関係を告げる名前も概念も示されていない。姿の見えない名探偵が読者の手前に居あわせて推理し、推理のついでに評判まで先取りして概念的な説明にかえてくれるのである。読者自身としては、会話がでてきてから会話を手がかりに、おもむろに見当つけていくしかない。独白ともつかない内面のつぶやきをまで会話と見なしていいのだろうか。しかし人物の内面にまで推参、文字どおり推参してあれこれ見当つけるのである。

律気なほどの外面描写と、うって変わった内面の出入り自由。劇化に手を焼くほど仕上がりが上乘だけに、これはいつそ奇態な文体である。加えて、好意はあるが揶揄気味な調子。「其二十」で十兵衛が予想に反して五重塔の工事をたまる場など、会話や地の文という前に、語りと内面とがとけあっている。

お浪も不審^{ふしん}、十兵衛も分らぬことに思へども辞^{いな}みもならねば、既感^{はや}応寺の門くゞるさへ無益^{むやく}しくは考へつゝも、何御用ぞと行って問へば、天地顛倒^{てんだう}こりや何^{どう}ぢや、夢か現^{うつ}か真実か、円道右に為右衛門左に朗円上人^{まんなか}中央に坐し
たまふて、円道言葉おごそかに、

これは太夫が宰領する義太夫の語りである。文楽の人形か無言の歌舞伎役者が正面に立ち、斜め手前の太夫がいつ

さいを語って聴かせる、少なくとも芝居絵か絵草紙を思い描きながら「百有余年」（其三十五）の昔を語る老人の言葉に耳傾ける叙法であろう。「其二十五」の刃傷の場へ鳶の鋭次親分が割って入り清吉を打擲する一節を追ってみると、その場のいっさいが鋭次ひとりの会話と清吉との懸け合いでたどれように語られている。重宝きわまる語りのこの叙法。加えるに芝居絵や絵草子の図柄までを文字に置きかえて風俗の描写は精細になる一方。だが肝心の十兵衛の内面を語るのに都合のわるいことが起きている。語って納得させたものが逆に読者の感覚を裏切るのである。

たとえば源太の折半仕事を断った性根を女房のお浪に語る場は小説の眼目に違いなからうが、のっそり十兵衛がああも雄弁に弁じ立てるのが不自然である。それが一向に不自然でないとするのは、十兵衛の内面を仮りに文言に写して繰り延べた作者の技法と承知しているからである。

あゝもう云うてくれるな、あゝ、五重塔とも云うてくれるな、（其十八）

に始まって七五〇字ちかい科白が、すでに読者の感覚を裏切っている。それを舞台やスクリーンで十兵衛が弁じたためたのでは、「十兵衛は馬鹿でもものっそりでもよい」がまんざらのウソになってしまう。無口の図々しい十兵衛が劇に輩出した理由であろう。

無口でもだめ、雄弁でもだめ、傍から語ってもだめ。露伴がそのように考量したわけではないけれども、「其三十一」の末尾から暴れだした猛風は「其三十二」で「江戸四方四里」「八百八町百万の人」を襲う飛天夜叉王の咆哮となり、「中にも分けて驚きし」円道為右衛門。その小細工で十兵衛がやむなく五重塔第五層の欄干に立った（「其三十五」）のは、驚くべき変奏であった。無口な十兵衛は、須弥山第四層毘沙門天―飛天夜叉王の来臨に全身で対峙した時、毘沙

門天さながら仏塔とともに真骨頂をようやく読者に現前したもののようである。

十兵衛の危機は内面から迫っていたのだ。自足した朗円上人―十兵衛の世界を円道為右衛門が「欺誑」(其二十三)つた時、十兵衛は「嗚呼なさけ無い」(其二十四)と身を起こしている。わが塔の真価が埋もれたまま生を終る「情無」さ(其十)や、源太の談合に「情無い」(其十五)と銷沈していた段でなく、今は塔と一つになって怒号を身に浴びるしかない、これは壮大な宇宙劇であろう。時と所をひきすえて夜叉王も塔も十兵衛も現前する。源太が上人の公案にとつおいつして地上の紆余曲折をたどった道筋とは違う。露伴は小説の次元を衝き抜けて詩劇の高みへ、一瞬かけ昇つたとおぼしい。

それにしても飛天夜叉王の怒号には、幸田鉄四郎成行の毒念⁽¹⁰⁾が何ほどか注ぎ込まれていたらう。そのころの三田村玄竜だけがおもしろくなかったのではあるまい。露伴みずから、

面白く無くて面白く無くて、癩癩が起つて癩癩が起つて、何とも彼とも仕方⁽¹¹⁾の無い中の閑を偷むで漸く綴り成したる露団々は売れたり、(『枕頭山水』「酔興記」、明23・1、『日本之文華』)

と洩らす。かつ、「混世魔風」(明23・11・13く25、『読売新聞』)の中に列举する。それら、

尼保牟橋区、姑尾屹房、三十門坊、月地、銀在坊、与誌房、牟羅迷都、屍多耶、迷岐市、牟迦賦志摩、千賊村、
慾浜

といった毒々しい地名を明治二三年当時の東京「八百八町」(其二十二)に読みもどして、「伽奇賀羅坊」「符俱圀坊」の紳士・大臣・紳商の名を具体的に思い浮かべてみれば悪態のすさまじさは思い半ばに過ぎよう。露伴の裡に熟して

いた職人―事業の夢はそれら紳商のありようと、およそ相容れないものであったろう。

「混世魔風」の悪態は歌舞伎にいう悪態の芸を衝き抜けたすさまじさであったが、『五重塔』暴風雨の叙法は、もはや浄瑠璃や歌舞伎の手に余るものである。近代的超人や魔王蹶起の説を伝える柳田泉『幸田露伴』（昭17・2、中央公論社）の見解があり、これは、森鷗外らS・S・S・「於母影」（明22・8、『国民之友』夏期附録）の訳詩群や北村透谷『蓬萊曲』（明24・5・2脱稿、29発行、養真堂）などと関連づけて検討しなければならない課題である。露伴がこの時に抱え込んでしまったらしい劇詩や叙事詩、あるいは俳諧形式・連環体・聯話形式にかかわってしよう。

しかし露伴の叙法はふたたび語りの地平にもどってくる。血の匂いは洗い流され、源太はようやく棟梁として蘇ったようである。作者露伴は、「自作の由来」で出逢った暴風雨を『五重塔』「其三十一」では季節はずれの「一月の末つ方」にずらした。末尾に近く「六十四年」「百有余年の今」を示して、十兵衛と源太の行跡も評判（註）に埋もれていく。ただ、

江都かうとの住人じゅうにん十兵衛こべ之を造り川越源太郎之を成す

という墨銘だけが、朗円上人の筆によって塔と共に時空さだめない作品世界に屹立する。

注(1) 新聞『国会』の初出については、登尾豊「『五重塔』の暴風雨―露伴文学再評価のために―」（昭46・4、『国語国文学研究』第六号）の注(5)に報告があるので摘記する。

其廿一の上(現・其二十一) 同・二・七／其廿一の下(現・其二十二) 同・二・一一／其廿二(現・其二十三) 同・二・二三

- 五重塔余意 其一(現・其三十三) 同・四・一二／五重塔余意 其二(現・其三十四) 同・四・一七／五重塔余意 其三(現・其三十五) 同・四・一九(完結)
- (2) 「日本近代文学大系」第七卷『幸田露伴集』(昭49・6、角川書店) 岡保生注
- (3) 『文芸と批評』第七卷二号(一九九〇・九、文芸と批評の会)
- (4) 日蓮宗谷中感応寺の第二世日源・第十世日長と大和国宇陀との由縁は未詳。
- (5) 伊原敏郎・後藤宙之助編『唾玉集』(明39・9、春陽堂) 所収。ここでは、もとの『新著月刊』(明30・8)「作家苦心談(其九)」の談話筆記による。
- (6) 江戸のある町・上野・谷根千研究会(代表―浦井正明)『谷中五重塔』1644～1988(“東京の地方”叢書2―谷中五重塔事典、1988・7・6、谷千根工房)
- (7) 菊岡沾涼編・小池章太郎校訂『江戸砂子』(正・続、昭51、東京堂出版)―もと享和一七年(一七三二)板行。
- (8) 注(2)三五七ページ注12。なお「六十四年」については補注133で塩谷賛『幸田露伴 上』(昭40・7、中央公論社)の見解を引く。
- (9) 浦井正明『もうひとつの徳川物語―將軍家靈廟の謎』(一九八三・一一、誠文堂新光社) なお同氏の案内にあずかったことを記し、感謝申しあげる。
- (10) 先行の露伴「封じ文」(明23・11～12、『都の花』)では、過去の破戒邪淫の妄執が大夜叉とその大音声と化し、幻鉤居士は責め苦の輪廻から脱けられなかった。
- (11) 評判という情報の様式については中野三敏『江戸名物評判記案内』(昭60・9、岩波新書) なお樋口一葉「にぎりえ」(明28・8脱稿、同9、『文芸倶楽部』第一卷第九篇)の結びも評判の形である。